

国際交流基金助成事業報告書

大阪薬科大学 薬学部薬学科4年次生 小路 晃平

1. はじめに

平成24年9月13日から9月15日にかけて、インドネシアのバリ島のヌサドゥアにて開催された FAPA 学術大会（アジア薬剤師連合学術大会）に本学国際交流基金助成事業「本学学生の海外交流協定大学等への派遣事業」を利用して参加しました。

FAPA 学術大会は、2年に1度開催され、アジア各地の薬剤師だけではなく薬学生も参加しています。プログラムは、シンポジウム・分科会・ポスター発表などがあり、私は今回薬学教育シンポジウムと、薬学生のための分科会に参加しました。



FAPA の会場前にて

2. 薬学教育シンポジウム（Pharmaceutical symposium）に参加して

13日はオープニングセレモニー、14日、15日のプログラムは『病院・薬局』『薬学教育』『伝統医療』などのシンポジウムや『薬学生のための分科会』『YPG（Young Pharmacists' Group）』などのプログラムが開催されました。各々が別の会場で同時開催されるため、何に参加するか迷いましたが、14日の午前は Symposium B Pharmaceutical Education ”Inter Professional Collaboration”に参加しました。

日本の現場では、病院や地域医療でも IPW（Inter Professional Work＝多職種協働）が注目され、現場で活躍している医療者や、薬学生だけでなく医学生や看護学生も IPE（Inter Professional Education＝多職種連携教育）に注目しています。そのため、私はこのシンポジウムに参加しました。

薬学教育シンポジウムの前半では、インドネシアでも大学や医療機関において IPE が行われている例や現場での連携についての発表がありました。薬学教育シンポジウム後半では、臨床薬学の最前線をより発展させることで人々をより健康にすることを目的として活動している組織である ACCP (Ameriban College of Clinical Pharmacy) の活動内容、臨床薬剤師の役割と資格、サービス、マネージメントなどについての発表でした。

ACCP が活動やコミュニケーションや教育を通して、どのようにして健康にもっていくのか？どのように評価して対応していくのかなどのお話を聞いていて、教育や協力の重要性をより学ぶことができました。また、質問者の話を聞き、世界で IPE が注目され臨床薬剤師の役割を拡大していくために、日本だけでなく各国で試行錯誤をしていることがわかりました。

3. 薬学生のための分科会

14日の午後は、インドネシアの薬学生が開催する『薬学生のための分科会』に参加しました。プログラム内容は、アイスブレイク（緊張で凝り固まった空気を壊し、話しやすい空気を作ったり仲良くなったりするためのゲーム）と各国の出し物でした。

私は、本学の PARC “パーク” という医療系同好会の会員で、PARC は IPSF（国際薬学生団体）の日本の窓口である日本薬学生連盟に加盟しています。私は昨年タイで開催された IPSF 総会に参加しました。FAPA には多くの日本国内外の薬学生の知り合いが参加していたため会話が弾みました。分科会の最後には時間をもらい、来年8月に日本で開催される日本薬学生連盟主催の APPS（アジア太平洋薬学生シンポジウム）についてプレゼンをすることができました。楽しい雰囲気での発表できたため、緊張せずに発表することができました。



来年日本で開催される APPS（アジア太平洋薬学生シンポジウム）のプレゼンをする筆者

15日は、引き続き薬学生のための分科会に参加しました。分科会では医薬品についての講演、公衆衛生についての講演、リーダーシップ理論についての講演がありました。公衆衛生についての講演の際には、10人で1グループになりディスカッションを行いました。前回、台湾で開催されたFAPAに参加した際は発言をすることができませんでしたが、今回は積極的に発言することができ、日本での薬局における公衆衛生活動について説明や、ディスカッションをすることができました。



分科会に参加した学生と集合写真

4. 交流を通じて

14日や15日のプログラム終了後には、懇談会や交流会に参加し、プログラム内では出来なかった薬学生生活動の話や実習の話をする事が出来ました。特に興味深かったのはフィリピン大学での実習です。フィリピン大学では、3年次に5人で1グループとなり医療者のいない地域で医学部や看護学部の学生と多職種間で協力しながら3週間の実習を行います。地域の健康を向上するために、薬学生が薬の適正使用についてレクチャーし、地域の農家などをホームステイして手伝うことで、地域を理解する学びを行っているようです。実習の細かな内容やフィリピンの薬学生の気持ちなどもじっくり聞くことができ、とても参考になりました。

5. おわりに

今回の国際交流基金助成事業により、海外での学術大会に参加できたことは非常に勉強になりました。また、本学では海外の学術大会に学生として国際交流基金助成事業を用いて参加することは前例がなかったため、今回をきっかけに、本学の学生が海外に興味を持ち、本学の国際交流がより一層活性化することを期待しています。